

# エッセイ *essay*

長野県 八十二文化財団発行の季刊誌『地域文化』にエッセイを執筆しています。長野県の風土・産物・地域性に触れながら、日本画・古典絵画・料紙の魅力や材料技法等の解説をしています。冊子は財団HPから冊子を購入できます。銀座にある長野県アンテナショップ（NAGANO 観光情報センター）2階でも購入可能です！



## 連載 日本画と私① 「日本画」

日本画を志したきっかけや、日本画概要を

『地域文化』季刊・通巻 125

2018年7月10日発行 特集は「長野県は宇宙県」



## 連載 日本画と私② 「憧れの基底材、絵絹」

日本画の代表的な基底材である絵絹の魅力について。裏彩色・裏箔・砑打ちなど、和紙とは異なる技法を駆使し表現する絹本技法についての解説。長野県は製糸業の歴史があり、それらの遺構や技術にふれながら執筆しました

『地域文化』季刊・通巻 126 2018年10月10日発行 特集は「地域と若者」



## 連載 日本画と私③ 「陰の立役者、布海苔」

長野県茅野市や諏訪市の冬の風物詩といえば、水田一面に広がる寒天の干場です。日本画の世界にも寒天の原料と同じ海草によってつくられた「布海苔」があります。接着剤として扱う「布海苔」は、箔装飾や修復でよく使用されます。その使用方法などを解説

『地域文化』季刊・通巻 127 2018年12月27日発行 特集は「飯田と喫茶文化」



## 連載 日本画と私④ 「心を捉える料紙装飾の世界」

大学生の頃からあこがれ、料紙研究を行うことになったきっかけの「西本願寺本三十六人家集」について。料紙装飾の方法（破り継ぎ・切り継ぎ・重ね継ぎ）などを解説しています

『地域文化』季刊・通巻 128 2019年4月10日発行 特集は「観光」



## 連載 日本画と私⑤ 「交流と交差の軌跡」

安曇野の碌山美術館での思い出が、新宿・中村屋サロン美術館での展示によって思い起こされた内容。相馬愛蔵・黒光夫妻、荻原碌山を中心として、そこに行き交う人々などにふれています

『地域文化』季刊・通巻 129 2019年7月10日発行 特集は「山村留学」



## 連載 日本画と私⑥ 「胡粉に始まり、胡粉に終わる」

母や伯母の作る「のた餅」の思い出から、手間を惜しまず時間をかけて作業しなくてはいけない「胡粉の溶き方」について解説。「胡粉が溶けて一人前」「胡粉に始まり、胡粉に終わる」など、昔から基本が大事であるという教えがあります

『地域文化』季刊・通巻 130 2019年10月10日発行 特集は「中野」



### 連載 日本画と私⑦ 「必要不可欠な材料、古糊」

長野・諏訪地方の大みそかの過ごし方・年中行事から、文化財保存修復の世界にある年中行事「古糊」「寒糊炊き」の話へ。女子美術大学でも行っている「古糊」作りを織り交ぜ、伝統的表具材料を解説しています

『地域文化』季刊・通巻 131 2019 年 12 月 27 日発行 特集は「雷鳥」



### 連載 日本画と私⑧ 「自然の織りなす妙味」

実家の神奈川秦野市と母の実家諏訪市が姉妹都市であることの不思議から、日本画画材で不思議な魅力を放つ銀泥・銀箔について。酸化し変色する銀色の妙味など、琳派の作品にも触れながら解説しています

『地域文化』季刊・通巻 132 2020 年 4 月 10 日発行 特集は「発酵」



### 連載 日本画と私⑨ 「気長に、心待ちに、」

新型コロナウイルス蔓延によって大学が遠隔授業になり、企画展の相次ぐ中止や延期。見たかったボストン美術館所蔵の日本美術の至宝『古備大臣入唐絵巻』『平治物語絵巻』についての解説などを。数年前に大学で行った長野県高山村の春先の事にも触れています

『地域文化』季刊・通巻 133 2020 年 7 月 10 日発行 特集は「輪」



### 連載 日本画と私⑩ 「目も綾な暈縹彩色、紺丹緑紫」

学生時代、書道同好会に所属しており、毎年軽井沢の寮で合宿をしていた思い出から、常々奇跡的な組み合わせだと感じている暈縹彩色、紺丹緑紫の話へ。正倉院宝物の『漆金薄絵盤』にみる、暈縹彩色、紺丹緑紫の解説などをしています

『地域文化』季刊・通巻 134 2020 年 10 月 10 日発行 特集は「秋山郷」



### 連載 日本画と私⑪ 「戯れる動物、子供のころも驚愕」

長野県表具経師内装協会主催の夏季研修会での講演中の失敗談や、古典絵画の模写について触れてみました。『鳥獣人物戯画』の模写は美大ではよく取り組む課題ですが、小学生への出張授業でもいい題材に。今は国語の教科書でも取りあげられていますね

『地域文化』季刊・通巻 135 2020 年 12 月 25 日発行 特集は「暮らしの中の道祖神」



### 連載 日本画と私⑫ 「最近のいとおかしきもの」

諏訪大社御柱祭りの里曳きの思い出から、みすずあられという長野県の老舗メーカーの作るお菓子の話へ。箔装飾で作る切箔は、その大きさにより別名「霞（あられ）」と呼ばれるものがありますが、お菓子のあられ・空から降ってくる霞と意外なつながりが！

『地域文化』季刊・通巻 136 2021 年 4 月 10 日発行 特集は「心のふるさと」



### 連載 日本画と私⑬ 「瓶の中に、日本画の中にも」

長野県アンテナショップで売っている、イナゴ・ザザムシ・ハチの子・カイコの瓶詰めの話から、昆虫由来の画材・材料について触れてみました

『地域文化』季刊・通巻 137 号 2021 年 7 月 10 日発行 特集は「中央構造線今昔」



### 連載 日本画と私⑭ 「今なお『両』や『斤』の世界」

若冲の動植綵絵が国宝に指定された話から、日本画絵具の話へ。絵具の単位「両」や「斤」は漢方薬の原料である薬草の計量に使われる単位からきています。よく考えると絵具は薬瓶にいれて売られていたり、明礬も漢方薬（止血の役割）であるなど意外な発見が！

『地域文化』季刊・通巻 138 号 2021 年 10 月 10 日 発行特集は「信州紬」





### 連載 日本画と私⑮ 「今でも『尺』や『匁』から始まる世界」

日本画や修復・表具のことにについて学ぶと、単位の基準は尺貫法であることに気づきます。特に和紙の世界に残る「尺」「匁」についての解説を。日本のいいところどり文化は、柔軟であいまいさがあり、メートル法と伝統的単位が共存するには丁度良いということです！

『地域文化』 季刊・通巻 139 号 2021 年 12 月 30 日 発行特集は「信州のジビエ」



### 連載 日本画と私⑯ 「暮らしの中に息づく地域性・多様性」

長野県諏訪地方のお雑煮の話から、関西の丸餅・関東の角餅の相違の話へ。実は修理や表装作業に使う刷毛の形にも丸みを帯びた関西型と、角ばった関東型があります。違いは餅のそれと似ており、地域性や人々の気質が反映されているものだったのです。

『地域文化』 季刊・通巻 140 号 2022 年 4 月 10 日 発行特集は「鬼無量」



### 連載 日本画と私⑰ 「縄文の息吹に触れる旅」

国宝土偶を所蔵する長野県茅野市の尖石縄文考古館で「縄文のビーナス」と「仮面の女神」を拝見。その印象や、縄文文化の価値を再発見した岡本太郎の話など。また土偶は植物の精霊という新説にも触れて、自論を展開してみました！

『地域文化』 季刊・通巻 141 号 2022 年 7 月 10 日 発行特集は「千石街道」



### 連載 日本画と私⑱ 「縄文からの掛け替えのないプレゼント」

諏訪や茅野周辺は太古の昔から黒曜石の産地。しかもその黒曜石は縄文時代、関東や青森・北海道まで流通するほどのブランド的存在だったようです。実は日本画の絵具でも黒曜石はあり、その特徴に触れてみると太古の昔、広く流通・珍重された要因が…（あくまでも自論）

『地域文化』 季刊・通巻 142 号 2022 年 10 月 10 日 発行特集は「森とともに」



### 連載 日本画と私⑲ 「極めて贅沢な芸術の秋」

令和 4 年は芸術鑑賞の当たり年。これほど国宝作品や日本美術の優品を目にできる機会はありませんでした。2 年越しの里帰り展示を果たしたボストン美術館蔵『平治物語絵巻』『吉備大臣入唐絵巻』や、染色家柚木沙弥郎先生の個展や開運堂のパッケージなどに触れています

『地域文化』 季刊・通巻 143 2022 年 12 月 30 日 発行特集は「山城」



### 連載 日本画と私⑳ 「創作のヒントはそこかしこに」

制作を行う上で色々なものからヒントを得ています。古典作品から、会話から、和歌等から。見た風景に感動し、絵にしたいということもありますが、様々な記憶や知識が時を経てまとめ絵になることも

『地域文化』 季刊・通巻 144 2023 年 4 月 10 日 発行特集は「里芋」



### 連載 日本画と私㉑ 「温故知新」

母の嫁入り道具の 1 つ「松本民芸家具」。使い込むほどに味わいが出て和洋を超越したような存在感をはなっていますが、日本画や表具の世界にも使い込むほどに味わい深くなる「仮張り」と呼ばれるものが。その構造と柿渋塗料について執筆しました。

『地域文化』 季刊・通巻 145 2023 年 7 月 10 日 発行特集は「信州と海」



### 連載 日本画と私㉒ 「甲州街道を巡る旅」

コロナの落ち着きと共に始まった「甲州街道御宿場印めぐり」、大人のスタンプラリー。江戸をでて最初の宿場「内藤新宿」はよく行く画材店やお団子屋がある馴染みの町。終盤の「上諏訪宿」近くにはサンリツ服部美術館が。所蔵されている作品について解説しています

『地域文化』 季刊・通巻 146 2023 年 10 月 10 日 発行特集は「ハヶ岳」



### 連載 日本画と私②③ 「繋ぐ思い、繋がる力」

江戸時代、「内藤新宿」で作られた内藤とうがらしが大人気だったようですが、今400年ぶりに復活し、脚光を集めているようです。また長野県小布施で栽培され続けられている「巴菊」という長寿菊について触れています。繋ごうとする人々の思い、力が大事ですね  
『地域文化』季刊・通巻147 2023年12月30日 発行特集は「阿智」



### 連載 日本画と私②④ 「和紙が紡ぐストーリー」

24年は新紙幣発行の年。高精細すき入れ技術や3Dホログラムなど偽造防止技術に注目が集まりますが、その原料についてはあまり知られていません。実は和紙の原料にもなる三桧が使われていますが、今生産を取り巻く環境に変化が…三桧紙や三桧について考えました  
『地域文化』季刊・通巻148 2024年4月10日 発行特集は「山に登る」



### 連載 日本画と私②⑤ 「千年の光、千年の移ろい」

源氏物語を解説してくれるという講座に誘われて行ってみると、偶然にも「絵合」を含む数帖についてのお話の回。和歌の優劣を競う歌合せは知っていましたが、絵の優劣も競われていたのですね。その絵合や、模写のことを執筆しました  
『地域文化』季刊・通巻149 2024年7月10日 発行特集は「坂城」



### 連載 日本画と私②⑥ 「世界のムナカタ、身近な棟方」

23年は生誕120年という事で最大規模の回顧展が行われました。版木に顔を近づけ一心不乱に掘る姿はあまりに有名。その人の名はいわずもがな棟方志功です。志功は古典技法の「裏彩色」を版画に応用しています。そして志功と長野県（諏訪）、意外な繋がりが…  
『地域文化』季刊・通巻150 2024年10月10日 発行特集は「史都・千曲」



### 連載 日本画と私②⑦ 「小春日に咲く、大輪の菊」

昨年10月末、嬉しいニュースが飛び込んできました。恩師が秋の叙勲で文化勲章を受章されたのです。令和天皇ご即位に際し調進された「悠紀地方風俗歌屏風」を手掛けられたのも恩師、田淵俊夫先生です。屏風のこと、紙の蝶番のこと、また先生について執筆しました  
『地域文化』季刊・通巻151 2024年12月30日 発行特集は「土の力」



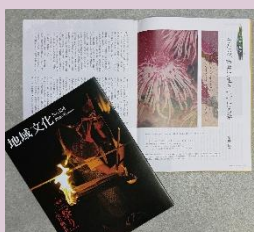
### 連載 日本画と②⑧ 「制作の合間に、コーヒープレイクを」

コーヒーにはちょっとこだわりが。様々な試みの末、今は生豆を煎る所から始めています(笑)。岩絵具の特徴を表現する際に出てくる「粒度」「粒度分布」という言葉、実はコーヒーの最新研究でも登場するワードです。さて、長野とコーヒー、どんな繋がりが？  
『地域文化』季刊・通巻152 2025年4月10日 発行特集は「地域を支える医の力」



### 連載 日本画と②⑨ 「絹の上に拓く、小宇宙」

長野にまつわる二つの「イタリア式」。そして「イタリア式」と「フランス式」双方の優れたところを生かして考案された「諏訪式」。いったい何のことでしょう(笑)。日本近代化の礎とその発展に欠かせなかった岡谷の歴史の一部をご紹介します。そして今、私が絵絹に描いていることの不思議…  
『地域文化』季刊・通巻153 2025年7月10日 発行特集は「信州の鉄道」



### 連載 日本画と③⑩ 「今なお、市井に生きつづける砧」

我が家の玄関先には大きな御影石の台が置かれています。私の制作には欠かせない道具の一つなのですが、この御影石を使って行う古典技法の一つ「砧打ち」について触れています。そして長野では生産量全国一を誇る「寒天」にも話が及びますが、面白い繋がりが。。  
『地域文化』季刊・通巻154 2025年10月10日 発行特集は「祭り」



### 連載 日本画と③ 「絹に魅せられて ー桑の葉の巻ー」

大学一年生の授業に絹制作というものがあります。絵絹に描く方法を指導するのですが、その際に触れる絹の特徴や技法、また（これについてはあまり授業では触れませんが）生糸を生み出す蚕と、その餌である桑葉の驚くべき力や関係について執筆しました

『地域文化』季刊・通巻 155 2025 月 12 月 30 日 発行特集は「スポーツの力」